

薄霧を隔てて見つめ合う

——『ノルウェイの森』から見る中日文化の距離と反響

北京大学マルクス主義学院

馬迪雅

『ノルウェイの森』を初めて読んだとき、私はきっと情熱的な青春の物語に足を踏み入れるのだろうと思っていた。ところが半分ほど読み進めた頃、心に残ったのはただ一面の空白だった。雪の降ったあとの校庭のように、音も足跡もない。その空白は虚無ではなく、むしろ抑制に包まれた感情——静かに行間を流れていく気配のように感じられた。

その瞬間、私はふと気づいた。文学は物語を語るだけでなく、文化の気質そのものを語っているのだ、と。

村上春樹の作品に登場する人物たちは、感情を直接口にすることがほとんどない。喪失しても不平を言わず、苦しんでも慰めを求めない。渡辺は親友を失い、直子はうつに沈んでいくが、誰も大声で泣き叫ぶことはなく、ただ黙って道を歩き、それぞれ内側へと落ちていく。その感情の抑制は、日本文化における「間（ま）」を思い起こさせる。「間」とは空白ではなく、意図的に残された距離——人と人のあいだ、人と世界のあいだの距離である。それは関係が過度に絡み合うのを防ぎ、個が自分の形を保つための余白でもある。

中国の大学生活では、私は友人たちと常に群れ、感情を遠慮なく共有することに慣れてきた。感情は外向きで、すぐに応答されることを求めるものだ。だが村上作品の中の人々は、いつも一枚の薄霧を隔てて互いを見つめている。にぎやかではなく、急いで近づこうともしない。その静かな距離感は、私にとって見知らぬものでありながら、強く惹きつけられるものでもあった。おそらくそれは、日本文化の一つの側面なのだろう。集団を重んじる表層の下で、一人ひとりが容易には触れられない私的な領域を抱えている。

そして後になって気づいたのは、中国文化の中にも、実はこの「間」が潜んでいるということだった。古人は「君子の交わりは淡きこと水のごとし」と言い、「天地と精神をともにする」と語った。それは抑制された感情表現であり、一步退くことで長く続く親密さを得る知恵でもある。私たちは激しい感情表現に慣れていますが、静かなつながりを本当に理解していないわけではない。ただ長い間、それを使ってこなかっただけなのだ。

『ノルウェイの森』には、物語の進行とは直接関係のない描写が数多く登場する。夕暮れの風、窓辺の埃、回るレコードプレーヤー、コーヒーの香り。ほとんど見過ごされそうなほど軽やかなそれらが、世界の時間をゆっくりとしたものにし、水面に広がる波紋のような余韻を生む。これは、岡倉天心が『茶の本』で語った「陰翳の美」を思わせる。日本の美学は、壮大さや明るさを追い求めるのではなく、微細で儂いものの中に秩序を見出す。磨き上げられた一つの茶碗、石の上に静かに佇む苔——それらは感情と時間を宿す器なのだ。

一方で、私たちが慣れ親しんできた中国的な美学は、どこか華やかで熱量が高い。祭りは灯りに満ち、婚礼は太鼓と銅鑼が鳴り響く。感情もまた「悲歡離合」「胸を打つ出来事」として語られる。村上が描くのは、それとは対照的な、音を立てない悲しみ——「心の中で小雨が降り続く」ような日常だ。だがよく考えてみれば、中国文化にも、かすかで持続する美は確かに存在している。文人が描いた江南の町、枯藤と老樹、疎らに響く鐘と寒月。宋詞の「梧桐更兼細雨」、元曲の「秋到辺城角声哀」。それらは日本の「寂」にも通じる感性だ。私たちもかつて、その緩やかさと柔らかさを持っていたのかもしれない。ただ、忙しい足音にかき消されてしまっただけなのだろう。

こうした東西の古典的気質が密やかに呼応していることに、私は親しみを覚える。美意識は国境によって厳密に分け隔てられるものではなく、時の奥深くで互いに反響し合うのだ。

作品の登場人物たちは、一見自由でありながら、決して幸福ではない。制度化された人生モデルを拒みつつも、新たな意味を見出せず、近代化の波に漂うブイのように存在している。この「軽さ」は、日本の現代文化の一つの底色だ。高度に発展した経済、精緻な秩序、豊かな物質は生活を軽やかにする一方で、重心を失わせやすくもする。

それに対して、中国の若者文化には、なお「重さ」がある。努力は報われると信じ、走り続けることで意味を得ようとする。日本的な「軽さ」は、私にとって反対側から自分を映す鏡のようなものだ——走るだけでなく、立ち止まる可能性も必要なのだと気づかせてくれる。しかし、その「軽さ」の下には、実は確かな「重さ」も潜んでいる。『ノルウェイの森』の登場人物たちは、表面は淡々としていなが

ら、内側には重たい記憶と悲しみを背負っている。理想を声高に語ることはないが、ある種の優しさの一線を静かに守り続けている。その秘められた「重さ」は、中国の年長者がよく口にする「静水深流」という言葉を思い出させる。

まったく異なるように見える二つの姿勢も、実は想像するほど遠く離れてはいないのかもしれない。

『ノルウェイの森』を読み終えても、私は答えを得たわけではない。ただ、日本という文化を少しだけ、以前よりはっきりと見た気がする。主張しない美、節制によって支えられた感情、世界と穏やかな距離を保つ生き方。それは私が育ってきた文化とは大きく異なる。だが、異なるからこそ、私は自分自身の中の、普段は見えなかった部分に気づいた——常に溶け込もうとし、遅れを恐れ、効率と速度に押されて前に進み続ける癖。そしてその静謐な「違い」の中に、私は確かに懐かしい影も見出した。月光に照らされた江南の庭、宋词に描かれた長い夜の細雨、年長者たちが無言のうちに示してきた優しさ。

おそらく、文化交流の意味とはここにあるのだろう。互いに同じになることではなく、違いの理由を理解し合い、その過程で、自分たちがすでに忘れてしまったものを再発見することにあるのだ。